

第7回京都駅前の再生に係る有識者会議 会議録

日時 令和8年3月25日（水）午後1時から午後3時まで

場所 京都市役所 分庁舎4階 第4会議室

出席 岩瀬 諒子 京都大学大学院工学研究科助教

大庭 哲治 京都大学経営管理大学院教授

嘉名 光市 大阪公立大学大学院工学研究科教授

松中 亮治 京都大学大学院工学研究科准教授

若林 靖永 佛教大学社会学部教授

以上5名（五十音順、敬称略）

1 開会

2 議事等

大庭座長

それでは次第のとおり、議事を進めさせていただきます。

まず1月23日から2月24日まで行ったパブリックコメントで、非常に多くのご意見をいただきました。その他にも、市議会でのご意見、座長宛の京都弁護士会の会長声明、市民団体の皆様方からのご意見もいただきました。

それら全てについて、委員間で共有し目を通してあります。多くの貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございます。この場で感謝を申し上げさせていただきます。

本日は、それらを踏まえ最終の意見まとめの検討に入りたい。本日の資料について、事前に委員には意見の全文とあわせて事前送付し読んでいただいているが、本日の議論のたたき台として、私と事務局でパブリックコメントの集計・要約・整理、それを踏まえた回答案や意見まとめの修正案を作成した。これをベースに、本日も議論いただきたい。

それでは、まず事務局の方から資料の説明をよろしく願います。

事務局

（資料1 「市民意見募集結果（集計）」説明）

（資料2 「市民意見募集結果（意見要約・対応方針）」説明）

続いて、まだ京都市会のほうで議事録が公開されていないため資料は無いが、パブリックコメントの開始前およびその後の市議会でも様々なご意見い

ただいている。

まず、パブリックコメント前の1月8日の市議会で、自由民主党京都市会議員団の寺田議員・田中議員から、「新景観政策当時、高さ規制を強化しても、建物を横に広げて容積率は消化可能ということであった。京都は高さを抑えることで、その魅力・特性を生かす方針であった。その際、京都の全体像を踏まえて都市計画を行うべきと指摘したが、忍び寄る破壊を食い止めるために、先行して高さ強化を行うこととし、市議会の全会一致で決まり、皆そのルールを守ってきた。」、「それを踏まえると、31m→60mという高さ規制の変更は、新景観政策当時の議論とは異なる路線。それを非難しているわけでないが、市としては、今後の京都の全体像と合わせて示していくべき。」、「京都駅だけでなく、二条や山科など、他の拠点の議論も進めるべき。」、「ホテルを誘導すべきでないというが、ホテルが京都駅近くであれば手ぶら観光の推進にもなる。」、「オフィスについて、他都市と同じ戦略では他都市はもっと大きな建物が建てられるため都市間競争に勝てないのでは。」、「京都駅一極集中の分散化ともバッティングする恐れがあるのでは。」、「京都はバスに大きく依存している。そこと上手に折り合いつけてウォークアブルな取組をすすめるべき。」と、ご意見をいただいた。

次に、維新・京都・国民市会議団の宇佐美議員・江村議員からは、「京都全体のゾーニングのなかで、京都駅前の今後の土地利用を考えると、高度利用はあって然るべき。大きなターミナルをどうするのかも重要。」、「京都駅前の再生で高さを緩和することによる、公共的な取組など、市民にとっての利益をわかりやすくするべき。」、「区役所、市バスの操車場など、市有地についても駅前再生に活かすべき。」、「開発によって固定資産税が増えるのは良いこと。税収増が高さ緩和の目的ではないが、市民全体の恩恵につながる。」、「駅前広場は市民・観光客がゆったり過ごすことができる場になることが望ましい。」、「オフィスを増やししながら、ホテルも一定程度あるとよい。」、「他都市と比べてオフィスストックが少ないため、オフィス床が増えることは好ましい。」、「1,000坪以上のオフィス供給が重要。」、「ハイテク・IT企業や、現在少ない業種が増えればよいと思う。」、「地下空間の充実も重要。市民のメリットとしても重要。」、「新しい交通システムを見込んでやっていくことが重要。」とのご意見をいただいた。

また、日本共産党京都市会議員団の森田議員、やまね議員、平井議員からは、「新景観政策を前提としない議論になっているのでは。」、「地価が上がれば、住んでいる人の固定資産税が上がり、流出につながるのでは。」、「塩小路通の渋滞の悪化につながらないか。」、「議事が一部非公開なのは

問題なのでは。特定の事業者への利益誘導なのでは。」、「駅前にオフィス空間を作れば活性化するという議論は見当違いでは。」、「京都駅のオーバーツーリズムに拍車がかかるのでは。」、「民間事業者へのインセンティブとは、民間事業者の利益優先ではないか。インフラや公共施設の更新に注力すべき。」、「駅前広場が60mのビルに囲まれる状況でいいのか。高層ビルは不要で、緑・文化・芸術が豊かな場所にすべきではないか。」、「他都市と同じになり、京都の特性を感じられなくなるのでは。」とのご意見をいただきました。

また、公明党京都市議員団の中村議員からは、「駅前広場が今の状況で、人のための空間を作る・確保する見込みがあるのか。」、「低層階の店舗は、全国チェーンに偏らない工夫が必要。」、「規制緩和だけでなく、その他のインセンティブも必要なのでは。」とのご意見をいただきました。

その後の市議会におきましても、自由民主党京都市議員団の寺田議員から「イメージ図について、イメージが先行しているのでは。駅前広場を広くするのは素晴らしいことだが、バスやタクシーターミナルを大幅に縮小することが本当に可能なのか。」、「グリーンインフラや省エネルギーについて触れられているが、大規模開発に対して弱いのではないか。」、「京都らしさや京都ならではの魅力を前面に押し出すべきでは。」、「京都駅前だけ、ビジネスだけではなく、市全体のまちづくりとの連動が重要である。」とご意見をいただきました。

また、日本共産党京都市議員団の平井議員からは、「オフィスが増えても住民が追い出されるのは意味がない。デベロッパーの利益にはなるが京都の発展にはつながらない。」、「高さや容積率を変えなくてもオフィスは作れるのでは。」などのご意見をいただきました。

(資料3 「意見まとめ 修正案」説明)

大庭座長

どこからでも結構なので、ご意見をいただきたい。

若林委員

全体として、これからの京都を考えるうえで、京都駅前の重要性を巡って多くの関心を集め、議論がなされていることは大事なことと感じている。

2点ほど思っている点がある。まず1点目は、京都駅前の再生にあたってのオフィスの必要性やオフィスの供給についてである。

新型コロナ以降、テレワーク等が可能になり、まとまったオフィスはいら

ないという議論もあるが、近年の動向は別で、不確実性の高い状況の元でアイデアを出し、共同で意思決定し、責任を持って取り組むことは、オンラインの関係性ではなかなか実現できず、やはりリアルな空間の場で人が集まることの重要性が高まっている。

机が並び、決まった席で事務仕事を行うような従来のオフィスは、AIの登場等によって需要が減っていくと思うが、人と人が出会って共同で新しいものを生み出し、責任を持って取り組んでいく新しいタイプのオフィスは、今後ますます重要になっていく。もちろん京都市内各地で作られるべきだが、様々な大都市で中心的な駅の駅前に新しいオフィスの供給が進められるなか、京都駅前も同じ役割が今後さらに期待される。

さらに、京都は単なる大都市ではなく、京都の持つ伝統・新しいことへの挑戦・美意識などの刺激がある。その環境にオフィスを構え、未来に挑戦する会社経営を進める場としての期待があり、京都でオフィスを構える需要は、ますます広がっている。

そういった流れの中で、需要の量を一概に測定することは難しいが、京都駅前で新しいタイプのオフィスが十分に供給されることが求められている。宿泊施設が十分供給されなければ観光需要が取り込めず観光消費額が伸びないのと同じように、オフィスも供給が重要。新しいオフィスの需要への対応として、京都駅前の再生をしっかりと位置づけるべき。

2つ目は新景観政策について。様々な見方があることは承知しているなか、申し上げる。私は新景観政策の際の審議会に委員として参加し、高さ規制を強化すれば土地の価格が下がり、京都経済にマイナスになるのではとの懸念に対して、経済学・商業論的にどう考えられるのかという議論を行った。

まず、やはり引き続き京都独自の特性を発揮するために、新景観政策の考え方や方向性はしっかり受け継ぐことが必要だと思う。このことは、本有識者会議のメンバーでも一致している。

次に、京都駅前という限られた空間でどう考えるか。今回、高さ規制の緩和の提案が含まれている。高さ緩和の是非を巡っては、今後も議論があると思うが、高さ緩和のみをもって新景観政策と矛盾することにはならないと考える。新景観政策は、様々なエリアの様々な景観を守るため、場所ごとに様々な規制を適用している。京都駅前の高さを現状のままとし、それを少しでも変えることが新景観政策に反するという捉え方は違うと思う。

もちろん、駅前の高さがどうあるべきは、本有識者会議の後でも議論がされると思うが、京都全体の景観政策が、京都駅前の高さ緩和によって大きく変わってしまうという見方は少し違うのではないかと思う。

大庭座長

2点のご意見をいただいた。

「京都駅前の再生」そのものに関しては全員賛成の中で様々なアイデアを出し合ってきた。その中で様々な課題にどう対応すべきかという中での1つの方向性としてオフィスの供給の観点のご意見とともに、新景観政策との関係性についても言及いただいた。

事務局からもご意見があれば願います。

事務局

若林委員から、オフィスや新景観政策の話をしていただいた。内容についてはこれまでの有識者会議でご議論いただいた内容に沿った内容であり、特に補足はない。

大庭座長

その他、ご意見いかがか。

松中委員

まず本有識者会議における京都駅前の再生に向けた意見まとめという事だが、これで京都駅前の再生が全て終わるわけでは全くない。京都駅前の再生に向けた第一歩である。他の委員の皆様も同様のお考えと思う。

そういった意味で、これから二歩、三歩と議論を進めていかなければいけないことがたくさん残ってるというのが正直な想い。

私の中で特に重要と思うことがいくつかある。

1つ目は、駅前でビルの建て替え等の再開発の際に、公共貢献をしっかりとやっていただきたい。ビルそのものだけではなく、広く京都駅を訪れる人や市民に恩恵が及ぶ形でしっかりと公共貢献をしてもらうための仕組み作りが、今後非常に重要になってくる。

もう1つは、長期的に考えると、駅前広場、地下空間、京都駅ビルなどは、このままずっと続くわけではなく、何らかのきっかけやタイミングで、変わっていく可能性がある。そのことを踏まえ、しっかりと長期的な視点を持ち、駅前広場と一体になったこのエリアをどう再構築・再生していくのか、本有識者会議では詳細に議論ができてないところが多々あるため、今後はそのところをしっかりと議論していく必要がある。

大庭座長

まさにこの第一歩、で、その次の第二歩・第三歩と、中長期、特に長期的な視点が必要だというご意見とともに、今後の再生が地域の方々や駅前を訪れるの方々に対して恩恵を提供する、公共貢献の必要性について、ご意見いただいた。

事務局からもご意見があればお願いします。

事務局

3点御意見をいただいた。

まず初めに、第一歩である点。本有識者会議で大きな方向性を示していただくことは非常に意義深いと同時に、パブリックコメントでは多様かつ具体的なご提案をいただいたと思っている。市としても、その内容を踏まえていく必要があると感じている。

また、公共貢献というお話もあった。意見まとめ案の中で、地域の将来像に資する取り組みを条件にして戦略的に考えていくべきとあり、非常に重く受け止めている。京都駅前を魅力的にしていくこと、様々な課題を解決していくということが目的であるため、しっかりと考えてまいりたい。

また、今後の長期的な視点というご意見もいただいた。昨今、先が読めないような状況、大きな変化というのがたびたび訪れるような状況である。継続的にまちのことを考えながら、長期的にまちづくりを進めていくことが重要ではないかと感じている。

大庭座長

その他、ご意見いかがか。

嘉名委員

市民意見を拝見した感想から申し上げますと、皆さんの関心が非常に高いと改めて感じたとともに、私の率直な感想として、非常に前向きな意見が多かったと思っている。つまりは京都駅前の再生に対する期待感を大きな流れとして感じている。

一方で、何かを変えることに対する不安感は同時に伴うもので、意見の中にも多く見られた。この不安感を解消しながら、かつ、期待感にも応えていくことが、改めて大事だと思う。

総じて全体で言うと、このままで良いという意見はほとんどなく、京都駅周辺は、やはり何らかの問題・課題を抱えていると皆さんは考えていると感じた。

多岐にわたる駅前を取り巻く課題・問題点は、本有識者会議でも共有している。わかりやすい例で言うと、現京都駅ビルは、およそ30年前に、新しい駅ビルのモデルとして作られた。大阪や神戸と比べても一番早かった。一方で、30年経つと、時代や環境が大きく変わっている。とりわけ、訪日外国人はこの20年間で日本全体では6倍を超え、京都ではこの10年間で7倍を超えている状態である。つまり30年前に駅ビルができた時と環境はかなり変わっており、これからの駅のあり方を考えることは必要不可欠と改めて思う。駅を利用している方が、かなりの混雑などを経験するなかで、やはりこのままではいけないという問題意識を持っておられると感じたし、そのことを我々は考えないといけない。

30年前と何が違うかという点、30年前は「駅ビル」だったということ。当時は、どちらかと言うと駅空間の中に都市的な機能を持ち込む形で新しい駅ビルの形を模索した。今回のテーマは駅前の再生、言い替えると時代に合わせてアップデートするという点で、駅ビル単体の問題ではなく、駅とまちをどう繋げていくかというテーマではないかと思う。そういう意味では、京都駅ビルの資産はしっかり受け継ぎながら、周りの街と、どうフィットさせていくのか、意見まとめにある様々なテーマに対応しながら街の将来像を考えていくことが重要だと思う。

また、私は京都市の美観風致審議会の委員もさせていただいているため、少し景観政策も関連付けて話すと、京都の新景観政策の理念は継承すべきと思うが、手法は動的に見直していくべきである。当初から20年経っており、建物や景観を取り巻く環境の動的な変化に合わせて適切な方法を取っていく。ただし、京都の景観を守り活かすという大きな方向性・理念は変えない、その中で京都駅前の再生も考えていくべきだと思う。

大庭座長

期待感と不安感の観点からお話いただいた。その中で、様々な課題をどういうふうに克服していくかという考え方について、非常に示唆に富むご意見をいただいた。事務局からもご意見があれば願います。

事務局

再生に関する期待感、一方で不安感というお話をいただいた。パブリックコメントでは、今後のまちづくりに関する具体的なご提案も多くいただいた。京都市としても、その内容をしっかり踏まえ、今後様々な取組を進めていく中で、期待感に応え、不安感を解消することに努める必要があると実感した。

また、駅ビルが約30年前にできて、時代の流れの中で、今後は駅とまちを繋いでいくべきというお話をいただいた。駅ビルができて30年経ち、駅前の人・交通の流れも大きく変わっている。京都駅一極集中と言われる混雑が現状かと思う。その中で、人の流れを踏まえ、人のための空間を作っていく、歩きやすくしていくことに取り組んでいく必要があると感じている。また、景観政策についても、世の中が動的に変化していく中で、手法も動的に変わるべきという示唆に富んだお話をいただいた。

大庭座長

その他、ご意見いかがか。

岩瀬委員

改めて、これだけ多くの市民意見をいただき、議論していることの重みを感じるとともに、この地域にとって、どのような価値を今回の再生で残せるのかということ、改めて強く感じている。

全体を通して、先ほど不安感ということがあったが、ポジティブなご意見や、今までの議論の内容をリフレーズするようなものも多かったと感じる。

その中で、駅前広場など、高層化することで圧迫感が絶対あるかという、しっかり広場を作ればむしろ広がり生まれるとか、建て替えて周辺の建物の低層部が充実することで、駅前空間の回遊性が街に広がるとか、地下との連動など、もっと詳細に議論すれば、ご意見いただいている期待感と不安感はずしも矛盾するものではないと思っている。1つ1つ議論することや、プロジェクト化されていくなかで、こういったものが丁寧に議論されていくとよいと改めて思う。

また、歴史的にも京都駅ビルが建てられた時には様々な議論があり、不安感も多かったと思う、また、京都タワーができる時も賛否があったかと思うが、それがエネルギーになり、革新的なことが起こってきたエリアであるので、この場所の再生が、京都全体の中で、いい意味で、革新的なものになってほしいと改めて思う。

最後に1つ、課題として多くの意見をいただいているとおり、特に重要と我々が議論してきたポイントとしては、交通の整理がやはり大事である。人中心の広場を作ると言っても、現状を考えると、交通をどう整理して、実際に憩いのスペースや緑のスペースをどう作れるかが課題である。今後、そのあたりの議論や検討ができると良いと改めて思う。

大庭座長

新たな価値をどう付加していくかと考えた時に、いただいたご意見の中には、いろいろ組み合わせることで、より良いアップデートができる取組もあるのではなど、非常に示唆に富むご意見いただいた。まだ十分に議論できていない部分もあるとは思いますが、今後の再生の第一歩につなげてきたいとのご意見であった。

事務局からもご意見があればお願いします。

事務局

京都市が今後、継続的に京都駅前の再生を考えていく上でのご示唆をいただいた。期待感に関するご意見、不安感に関するご意見について、両方とも課題であり、しっかり考えていくべきと感じている。

また、駅前広場に関わる交通の整理は、まだまだこれからというご意見もいただいた。意見まとめの中でも、憩いの空間や歩行者空間については、様々な調査、関係者との調整など、中長期的に、詳細に検討進めるべきと記載していただいているが、京都市としても、公共交通も人中心の空間も必要であるなか、それらを両立させていくべきと考えている。現況も踏まえ、しっかり考えていかなければならないと感じている。

大庭座長

その他、ご意見いかがか。

嘉名委員

意見まとめや市民意見は、テーマが交通・観光・駅・景観・京都の都心の活性化・環境・防災など、非常に多岐にわたっている。つまり、総合的な都市デザインを時間かけて実現していくことが求められている。決して、高さ規制の緩和で高いビルだけをぼんと立つようなことを目指しているわけではないことは確認しておきたい。

大庭座長

座長として、そのとおりだと思う。今後、是非そういう形で進めていただきたい。

私からも何点か申し上げる。

まず初めに、このパブリックコメントで非常にたくさんのご意見をいただき、改めて本当に感謝申し上げます。資料1をご覧いただきたいが、あらゆる世代からご意見をいただいた。とりわけ、この会議では20年後を見据えて議

論してきたなか、その現役世代といえる 30 代 40 代 50 代の方々から丁寧なご意見をいただいたことは、非常にありがたい。また、京都駅前にフォーカスした議論してきたなか、下京区の皆様からご意見をたくさんいただいたことも非常にありがたい。併せて、市全域からご意見いただいたということも、重ねてお礼を申し上げたい。

様々なご意見をいただき、全て拝見した。有識者会議で提示した方向性にご賛同いただく方もたくさんおられたし、一方で、ご懸念や問題点を指摘いただいた方もたくさんおられた。全てを大事にしていききたいし、それらを踏まえて今回この意見のまとめを、取りまとめたい。

その上で、2 点申し上げる。

資料 2 の 22 ページをご覧ください。環境配慮・防災・安心安全といった視点は今後ますます重要になる。今朝もニュースで見たが、京都には関係ないと思うかもしれないが、例えばミサイルが飛んできた時どうするのか。そういった観点での地下空間や都市再生のあり方なども、今政府で議論されている。防災や様々なリスクにどう対応するのかは避けては通れない視点だと思っている。

次に 33 ページ、快適な歩行者空間や周辺エリアへの回遊については少し強調したい。京都駅前のみならず、その周辺エリアでは様々な個性のあるまちづくりが展開されている。それとどうハード・ソフトで連動・連携していくかは非常に重要な視点である。この点について、資料 3 の意見まとめでは記載されているが、資料 2 の有識者会議の考え方（案）で記載できていないと改めて思ったので、加筆を提案したい。事務局いかがか。

事務局

地下空間のあり方、周辺エリアのとの連携について、資料 3 には記載しているものの、資料 2 では少し不十分な点もあるので、記載について検討する。

大庭座長

その他、ご意見いかがか。特に資料 3 の黄色のハイライトの部分は、今回の様々なご意見を踏まえて修正・加筆等をしている。

嘉名委員

先ほど座長からも「20 年後までの将来像」とあったが、資料 3 の最後のスケジュールを見た時に、20 年後が概ねどの位置なのかが分かる方がよいと思う。明確にここであるとは言えないと思うが、短期・中長期と書いてあるど

のあたりが20年後なのか少し明確になると良いと思う。

大庭座長

資料3の2ページに、概ね20年後までの将来像と記載しているなか、8ページでも概ね20年がどのあたりかを記載してはとのご意見であった。事務局いかがか。

事務局

嘉名委員のご意見のとおり、明確に「ここが20年」にするのは難しいが、短期・中長期だけではタイムスパンが分かりづらいと思うので、提示方法を検討したい。

大庭座長

承知した。

それでは、本日も活発な議論いただき、感謝申し上げます。皆様のご意見が出尽くしたと思われるので、本有識者会議は本日で最終回とし、本日出たご意見を踏まえた修正及び最終の意見まとめの市への提出は、座長一任とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

委員全員

異議なし。

大庭座長

では、そのようにさせていただきます。

大庭座長

最後に、座長として発言したい。

まず、これまで計7回、長時間にわたり活発なご議論をいただき、感謝する。昨年ご逝去された加須屋委員も含め、委員の皆様方や事務局には大変ご尽力いただいた。非常に短い時間の中で、ここまでの取りまとめを作れたのは、まさに委員・事務局・そして市民の皆様方からたくさんの意見をいただいたおかげである。改めてお礼を申し上げたい。

本有識者会議として、京都駅前の将来像に向けた第一歩とはいえ、一定の方向性を見出すことができたのではないかと考えている。この議論が、ぜひ20年後の京都駅前の再生に繋がっていくよう祈念をしたい。私自身も今後とも努力してまいりたい。

とりわけ、パブリックコメントや新聞報道など、新景観政策や高さ規制に関する高い関心が寄せられていたと感じている。釈迦に説法かもしれないが、高さ規制が、住環境や景観を守るという、非常に重要な役割を果たしているのはご承知の通りである。一方で、都市の更新を一部阻害してしまう、社会的な効率性を妨げてしまうといった、負の側面も併せ持っているということも、是非ご認識をいただきたい。

その正と負の両面を、時間軸の中でどうバランスをとっていくのかが非常に重要である。そういう意味で、今回、京都駅前では高さ規制を一部・限定的に緩和をすることで、京都駅前の再生に貢献できるのではないかと、そういう観点から、議論を進めてきた。

ここであえて申し上げるが、座長として、傍聴の皆様に配慮が十分ではなかった点を反省すべきと感じている。前回の有識者会議のあと、いろいろな報道や新聞記事を拝見した。新景観政策との関係に関する議論が全くなかったというご意見も拝見した。その点は伝え方の配慮が足りなかったと思っている。

新景観政策、先ほども委員の皆様方からご意見があったとおり、無視をして議論してきたわけでは決してない。我々は有識者として、新景観政策の経緯や目的は十分に認識をしている。先ほど若林委員や嘉名委員は京都市の景観政策との関係性を申し上げられたが、私も新景観政策の後、京都市景観政策検証システム研究会の委員を務め、景観白書に関する初期の立ち上げに関わった。景観保全には関心を持っているし、どういった状況に今至っているのかについても注視しているつもりである。そういった点について傍聴の皆様に伝える配慮が足りなかった点については改めてお詫びをしたい。

最後に、新景観政策との関係性について述べたい。50年先、100年先を見据えてと謳われており、非常に重要な視点だと思っている。一方で、50年先、100年先の将来像を固定的に描き切るべきではないとも思っている。将来世代が選択できる余地をきっちり残していくことが大事で、その観点は新景観政策の思想とも合致していると考えている。

京都駅前での高さ規制の見直しは、決して高層化そのものを目的とはしていない。繰り返しになるが、京都駅前の様々な建物の更新、レジリエンスの獲得、オフィス需要に応える、オーバーツーリズムの課題を克服するなど、様々な課題を解決する手段として高さ規制の緩和があるとの視点で検討してきた。

決して高さ規制の緩和を主眼として検討してきたわけではなく、できることならその他の様々な工夫で課題が解決できればと思うが、昨今の状況、環境変化、時間軸などを踏まえると、高さ規制を緩和し、より早い20年後を見

据えて更新をしていくことが京都市民にとっても非常に望ましいのではないかという観点で、意見をまとめさせていただいた。

最後になるが、様々なお議論いただきました皆様方に改めて感謝を申し上げます。

事務局

最後に、京都市都市計画局長の籬から閉会のご挨拶を申し上げます。

都市計画局長 籬

本日は大変お忙しい中、熱心なお議論ありがとうございました。先ほど座長からもご紹介ありましたが、昨年の4月以降、7回にわたって、本有識者会議を開催させていただきました。

7回の会議だけでなく、事前に資料を読み込んでいただく時間などを合わせますと、1年間の中で大変濃厚なお時間を頂戴したと思っています。その上で、京都の玄関口としてどうあるべきかについて、具体的に多岐にわたる観点から、具体的なご議論をいただきました。

そしてこの意見まとめが、これからの京都駅前の再生に向けての第一歩ということでございます。我々も、そのように受け止めております。

また、本有識者会議として行いましたパブリックコメントについても、たくさんのご意見をいただきまして、我々事務局としても感謝しております。先ほどのご議論の中でもありましたが、多くの期待がある反面、不安がある、その上で、この期待と不安は必ずしも相反するものではなく、今後さらに議論を重ね、丁寧な説明をすることによって、よりアップデートできていくというご意見もいただきました。京都市としても、それをしっかり肝に銘じて、これからのまちづくりを進めていきたいと考えています。

今後、意見をまとめていただきましたら、まちづくりの第一歩として、速やかに取り組めるものはスピード感を持って、また、駅前広場の作り込みや交通の再編など、時間をかける必要があるものはじっくり丁寧に時間をかけて、20年先の、駅前の再生を目指して取組を進めてまいりたいと思っております。

この1年間本当にありがとうございました。またこれからも色々な形で京都市政に、ご指導、ご助言賜ればと思いますので、よろしく願いいたします。簡単ではございますが閉会のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

3 閉会